An aerial photograph of a city. In the upper portion, a wide river flows horizontally. To the right of the river is a large green baseball field with a reddish-brown infield. The rest of the image shows a dense urban area with various buildings, streets, and parking lots.

T

O

ここまで分かった
戸田市の埋蔵文化財
最新情報展解説冊子

D

A City
Museum

あいさつ

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口14万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の急激な変化とともに社会的、文化的な環境も急速に変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護及び活用が求められています。

今回の企画展示では、戸田市が行った近年の発掘調査成果を中心に、市内で出土した遺物を縄文時代から近代まで取り上げ解説します。本企画展示が、戸田をより深く知るための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本展示の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和4年6月12日

戸田市立郷土博物館



写真1 南原遺跡12次調査空撮

目次

- P03 第1章 戸田市の遺跡
- P05 第2章 弥生時代の戸田
- P11 第3章 古墳時代の戸田
- P16 第4章 平安時代から近代の戸田

凡例

1. 本冊子は、文化財企画展「ここまで分かった！戸田市の埋蔵文化財最新情報展」（2022年6月12日から2022年7月31日）のデジタル解説冊子である。
2. 本冊子は、戸田市立郷土博物館学芸員が執筆、デザインを行った。
3. 本冊子に掲載されている遺物、写真、イラストは全て戸田市立郷土博物館で管理している。

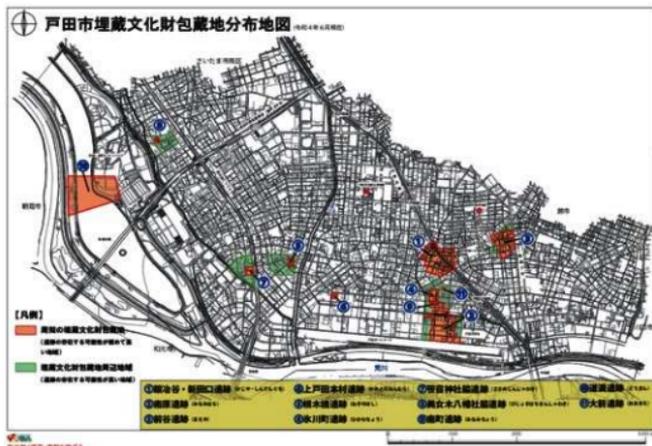
第1章 戸田市の遺跡

現在市内では11カ所の遺跡が「^{しゅうち}周知の埋蔵文化財包蔵地^{まいざうぶんがざいほうざうち}」として登録されています。

代表的なものとして上戸田5丁目に位置する^{かじや}鍛冶谷・^{しんでんぐち}新田口遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期における低地の大規模な集落・^{ほうけいしゅうこうぼく}方形周溝墓群として埼玉県選定重要遺跡となっています。

また、^{みなみちよう}南町一帯に広がる^{みなみはら}南原遺跡では、古墳時代後期である5世紀末から6世紀後半まで古墳を築造しており、^{かみとだほんむら}上戸田本村遺跡のものを含め現在まで9基の古墳が見つかっています。

県内でも一番標高が低い場所に位置する古墳群であるため、水運や交通等に重要な役割を持った有力者が築いた可能性があります。



第1図 戸田市埋蔵文化財包蔵地図

弥生時代以前の戸田地域 Toda area before Yayoi period

戸田市が位置する荒川低地は、埼玉県南部から東京都北東部にかけて広がる、幅 6km から 7.5km ほどの低地です。

荒川低地の形成は、約 2 万年前の最終氷期まで遡ります。最終氷期は、寒冷な環境であり、北アメリカやヨーロッパに巨大な氷河が形成されたため海抜が現在より 120m も低く、東京湾は神奈川県神奈川県の浦賀付近まで陸地でした。

この時期荒川低地を流れていたのは旧利根川で、海面下の低下による下刻作用によって深い谷筋を形成していました。戸田地域では、本町付近で現地表面から 50m の地点がこの時期の地表面であったとみられます。

その後、1 万 4000 年前から温暖化の影響により大陸を覆っていた氷河が融解することにより海面が上昇します。

海面の上昇は、河川による埋積作用を促進し、谷を埋立てました。利根川は現在よりも水量が多かった為、埋積速度も速く、1000 年で約 4m も埋積した場所もありました。

約 6000 年前には、海抜が現在より 3 m 上昇し、川越市や茨城県古河市付近まで海が達しました。戸田付近は、奥東京湾と呼ばれる湾になります。常設展示室に展示されている縄文人骨はこの時期のもので、丸木舟とともに沈没したと見られます。

旧利根川は約 3000 年前に、中川低地に移り、旧荒川も同様に中川低地を流れるようになります。これ以降、荒川低地を流れる河川は、近世の荒川荒川遡替まで旧入間川のみとなり、洪水などの影響が少ない地域となります。

しかしながら、戸田地域に人が住み始めるのは約 1000 年後の 2 世紀後半頃になります。

微高地上の堆積土を見ると、遺構検出面より下の層は、灰白色の粘性が強いシルト層であることが多く、葦などの植物の痕跡が多くみられます。

そのため、旧利根川・旧荒川の東遷後も市域の大部分は、湿地帯になっていたと見られ、微高地が乾燥した陸地となるのは、弥生時代になって以降のことと考えられます。



灰白色のシルトにあるオレンジ色の丸い痕が、植物炭になります。水中では、根に酸化鉄が付着するためのような痕が出来ます。

写真2 前谷遺跡 11 次調査 遺構検出部



写真3 戸田市出土縄文土器

縄文土器 南原遺跡 12 次、前谷遺跡 7 次 Jomon pottery BC5000-BC4000

戸田市には、縄文時代の遺跡はありませんが、発掘調査で縄文土器の破片が見つかることがあります。

旧入間川や荒川等の河川によって運ばれてきたと考えられ、縄文時代前期から後期のものが見つかっています。

Haniwa Topics〜縄文〜

縄文時代の縄文は土器に付けられた縄の跡のことだよ。
実は関東地方では、古墳時代前期まで土器に縄文をつけてるんだ。

はにわくん



第2章 弥生時代の戸田

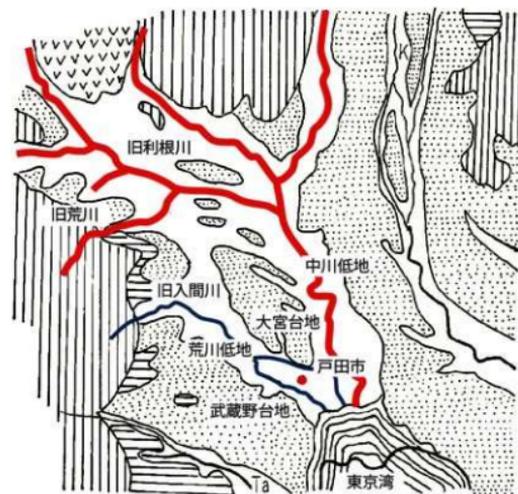
戸田に人が住み始めたのは、弥生時代の後期後半の時期で、2世紀後半になります。

この時期の戸田地域は、荒川低地を流れていた旧利根川・旧荒川が中川低地に移ることで洪水が起これにくくなり、また微高地のわりには湿地が残り稲作を行いやすい環境になっていました。

戸田地域に移住した人々は、土器の形から武蔵野台地北部や大宮台地の集落から来たとみられますが、住居等は東海地方に多く見られる周溝持ち建物を採用しているため、東海地方からの影響もあったと考えられます。

また、前谷遺跡9次調査では方形周溝墓から長野県北部に見られる箱清水式土器の高坏が見つかり、中部高地からも人が来ていたことが分かりました。

105
|



第2図 河川流路想定図

(弥生時代後期)

『戸田市史通史編上』を一部変更

上戸田本村遺跡 *Kamitodahonmura site*

上戸田本村遺跡は、戸田市本町に位置する遺跡です。

この遺跡は、弥生時代後期から中世までの複合遺跡で、遺跡内には古墳時代後期の古墳（くまん塚）があります。

上戸田本村遺跡2次調査と3次調査で検出された溝状遺構は弥生時代後期のもので、断面がV字型を呈するため調査報告書では集落を巡っていた環濠の可能性を指摘しています。

溝状遺構から出土した遺物は、溝中層から上層にかけて多く出土していることから、溝が使用されなくなり、一定期間後に廃棄されたとみられます。また、遺物から市内で一番古い遺構と考えられています。

この時期に近い遺構としては、鍛冶谷・新田口遺跡1次調査の鍛冶谷1号方形周溝墓、南原遺跡1次調査の方形周溝墓、前谷遺跡9次調査の1号周溝状遺構等の方形周溝墓が市内で見つかっています。

しかしながら、市内ではこの時期の住居跡など生活に関わる遺構は確認されていません。方形周溝墓は、奉獻された土器が残しやすいので時期の特定ができますが、周溝持ち建物跡は遺物の出土が少ないため、時期を特定することが難しいのです。



写真4 上戸田本村遺跡2次調査溝状遺構

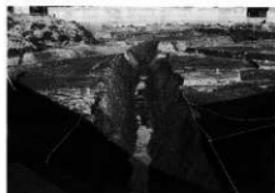


写真5 上戸田本村遺跡2次調査溝状遺構



写真6 上戸田本村遺跡2次調査出土壺



写真7 上戸田本村遺跡2次調査出付甕

弥生土器 壺

Yayoi pottery vase 2C

壺は、米や水などの液体を保管するために用いられたものです。

上戸田本村遺跡から出土した壺は、頸部の羽状縄文を沈線（しんせん）で区画し、その下に山形文を配置します。

この文様は、南関東で多く確認されており、遺構から出土した土器では市内で一番古いものとなっています。

弥生土器 甕

Yayoi pottery pot 2C-3C

甕は、米などを煮炊きするために用いられたものです。

底部に脚がつき、胴部には調整痕であるハケメが残されています。

この特徴をもつ甕は静岡方面からの影響を受けたと考えられています。

Haniwa Topics ～周溝状遺構と方形周溝墓しゅうこうじょういこうと方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼ～

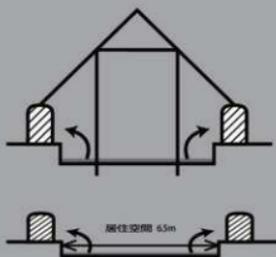
近年の発掘調査報告書では、溝状遺構の中で方形になる遺構を周溝状遺構と呼ぶことが多くなっています。

周溝状遺構は、昔は方形周溝墓と呼ばれ有力者の墓とされていましたが、近年は周溝内にちゅうけつ柱穴を持つものが確認されていることから、方形周溝墓とよばれる遺構の多くは低地特有の住居である周溝持ち建物だと考えられるようになりました。

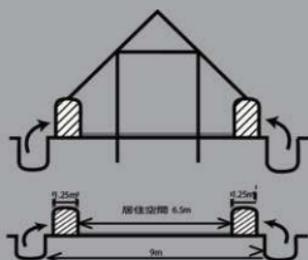
しかし、発掘調査で方形周溝墓と周溝持ち建物を見分けることが難しく、また調査面積が狭く一部しか確認できない場合は、どちらか判断することができないため、発掘調査報告書では周溝状遺構という名称を使用しています。

たてあなてものあと

竪穴建物跡（内側掘削）



周溝状遺構（外側掘削）



第3図 住居構造模式図

（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012

『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第394集 前谷遺跡』を一部変更

前谷遺跡 *Maeya site*

前谷遺跡は上戸田2丁目に位置する遺跡です。11次調査まで行われ、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代、中世までの複合遺跡となっています。

2021年1月から2月に行った前谷遺跡10次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の周溝状遺構や溝状遺構が確認されました。弥生土器では、精巧に模倣された壺のミニチュア土器や鉢などが見つかっています。

前谷遺跡11次調査は2021年7月から8月に行われ、弥生時代後期から古墳時代前期初頭までの周溝状遺構、溝状遺構が見つかりました。

現在までの発掘調査によって集落北部に方形周溝墓の墓域があり、その周りを周溝持ち建物で囲む集落形態だったと考えられます。

また、鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡で検出されている竪穴建物跡は、本遺跡からは検出されていません。他の遺跡と集落の性格が異なるのか、または集落が継続した時期が異なるかなどその要因は分かっていません。



写真8 前谷遺跡10次調査西側完壁状況



写真9 前谷遺跡10次調査遺物出土状況



写真10 前谷遺跡11次調査西側完壁状況



写真11 前谷遺跡10次調査出土土器



写真12 前谷遺跡11次調査出土土器

弥生土器 ミニチュア土器

Yayoi pottery miniature vase 3C



写真13 前谷遺跡10次調査出土ミニチュア土器

ミニチュア土器は、小さいサイズで作られた土器のことです。今回見つかった土器は、口縁部・胴部にある縄文や内形浮文を正確に模倣しており、市内で出土したミニチュア土器の中では、珍しいものになります。用途としては、祭祀や玩具などが考えられますが、特定はされていません。

弥生土器 壺

Yayoi pottery vase 3C



写真14 前谷遺跡10次調査出土壺底部

前谷遺跡10次調査では底の内面が赤彩された壺が見つかりました。一般的に壺の内面は頸部付近までしか赤彩しないため、米やモミなど特別なものを入れておく他とは異なる壺であったのか、また壺が壊れたあと、赤彩用パレットとして再利用されたなど様々な解釈があります。

前谷遺跡9次調査 *Maeya site Ninth survey*

前谷遺跡第9次調査は、2021年に行われ、弥生時代後期の方形周溝墓、平安時代の大溝を確認しました。

検出した方形周溝墓の範囲は、全体の3分の1程ですが、周溝からは壘・高坏、甕が多く出土しました。

特に高坏の一つは脚部に三角形の透穴を持ち、口縁は大きく外反していることから、長野県の箱清水式土器と考えられ、長野方面から人が来ていたことが分かります。

南関東では弥生時代後期後半ごろから、東海地方の影響を強く受けた土器が出土しているため、移住を含め強い交流があったと考えられています。また戸田市内でも周溝持ち建物跡が検出されるなど、土器だけでなく住居構造も東海系の影響が強いものでした。その中で、箱清水式土器の発見は東海地方だけでなく、長野など北側からの影響もあったことを示しており、戸田の開発が様々な地域に関連する中で行われたと推測できます。

また、出土した土器の多くは全体を赤彩しており、方形周溝墓に供献されていた時は、墳丘上に赤い土器が整然と並んでいたとみられます。



写真15 前谷遺跡9次調査方形周溝墓



写真16 前谷遺跡9次調査遺物出土状況



写真17 前谷遺跡9次調査出土土器



写真18 前谷遺跡9次調査遺物出土状況

Haniwa Topics

高坏や器台の脚部にある穴を透穴と呼んでいます。戸田市で出土する土器の透穴は基本的に丸穴で、三角形のものはほとんどありません。

全国的に見ても、この時期に三角形の透穴を用いる土器は、長野県の箱清水式土器のみとなっています。



写真19 前谷遺跡9次調査出土高坏

Haniwa Topics ～弥生時代と古墳時代～

戸田市に人が住み始めた弥生時代は、灌漑かんがいを用いた稲作の開始を持って始まるとする考えが多く採用されています。

一方で古墳時代は、定型的な前方後円墳ぜんぽうごえんぼんである箸墓古墳はしほかふんの築造（3世紀中頃）をもって始まるという考え方、箸墓古墳前に築造された規模の小さな前方後円墳をもって開始という考え方（3世紀前半）、古墳祭祀こがたに用いられる小型器台せいたいの出現をもって開始とする考え方（3世紀初頭）などがあります。

10
|
|
実は、古墳時代がいつからなのかは、戸田市の遺跡にとって重要な意味を持ちます。もし古墳時代を箸墓古墳の築造以降とするなら、戸田市の集落は大部分が弥生時代の集落となります。一方で小型器台の出現をとる立場だと、ほとんどが古墳時代の集落となります。

そのため近年の発掘調査報告書では、遺構の年代について弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭というように広めに書くようにしています。



写真 20 箸墓古墳

箸墓古墳

奈良県桜井市にある前方後円墳です。築造時期は3世紀中頃とされ、卑弥呼ひみこの墓とも言われています。

第3章 古墳時代の戸田

古墳時代前期初頭（3世紀前半）は、市内の集落が大きく飛躍する時期となります。遺跡数も増え、多くの人々が生活するようになり、古墳時代前期の特徴の一つは、それまで建物に周溝しゅうこう持ち建物を採用していたのが、も たてもん 堅穴建物をたてあなたてもん用いるようになります。

また土器は東海・畿内のものが多く搬入されるようになり、それまで各地域で特徴的な土器を使用していたものが全国で均一きんいつてき的な様相になります。

古墳時代中期には前期と比べて、住居数は少なくなり、南原遺跡みなみはらや上戸田本村遺跡かみとだほんむらで堅穴建物を数軒確認できるのみです。この時期の特徴的な遺構には、上戸田本村遺跡3次調査で検出された溝状遺構があります。部分的な検出でしたが、壺つぼ・甕かめ・高坏たかつきなど大量の土器が出土し、さいし祭祀を行った可能性があります。

古墳時代後期には、南原遺跡・上戸田本村遺跡に古墳群が作られるようになります。5世紀末から上戸田本村遺跡内にある6世紀末とされる「くまん塚」古墳まで約100年間築造されました。

しかしながら、この時期は堅穴建物など、生活を伺えるような遺構は少なく、古墳を作るような有力者がどこに住んでいたのかはわかっていません。

鍛冶谷・新田口遺跡 10次調査 *Kajiyasindenguchi site Tenth survey*

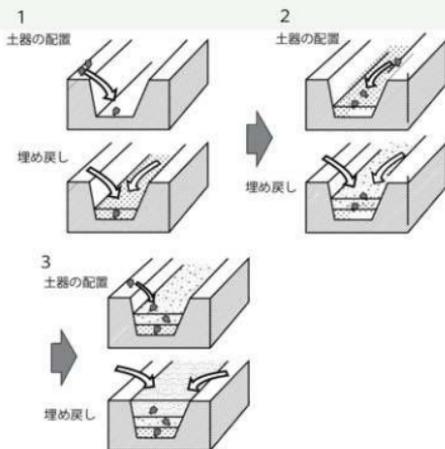
鍛冶谷・新田口遺跡 10次調査は、2015年に行われ、古墳時代前期のたてあなたてもの 竪穴建物・しゅうこうじょういどう 周溝状遺構・溝状遺構を検出しました。

このうち第2号周溝状遺構からは、大量の土器が見つかりました。土器は、溝の下層・中層・上層にそれぞれまとまった形で出土したため、きょうけん 供献と埋め戻しを数回行ったと考えられます。

方形周溝墓では、どのような祭祀を行っていたか具体的に分かりませんが、今回の事例で複数回の祭祀を行っていたことが分かりました。



写真21 2号周溝状遺構土器出土状況



第4図 土器埋没過程模式図「鍛冶谷・新田口X」を一部変更



写真22 2号周溝状遺構出土土器 上層



写真23 2号周溝状遺構出土土器 中層



写真24 2号周溝状遺構出土土器 下層

上戸田本村遺跡 3次調査 *Kamitodahonmura site Third survey*

上戸田本村遺跡3次調査は、1995年に行われ、弥生時代後期の溝、古墳時代前期の竪穴建物、溝、古墳時代中期の溝状遺構、中世の堀を検出しました。

このうち古墳時代中期の溝状遺構からは、壺・甕・埴・高坏など大量の土器がみつかり、総数は破片の物を含めて441点にもなります。

この時期は、前期と比べ発掘件数が少なくなるため、このように土器が大量に確認されるのは異例のことです。

遺物の中では、高坏が多いことから祭祀に関係している可能性があります。



写真25 溝状遺構土器出土状況



写真26 溝状遺構出土土器

Haniwa Topics

この時期になると壺と甕の見分けがつかなくなって、壺が使われなくなるんだ！



壺



甕

Haniwa Topics

中国の書物である『魏志倭人伝』によると、3世紀の倭の人は食事の時に高坏を使用していたんだって。



戸田市の古墳 *Kofun in Toda City*

^{みなみはら}南原遺跡と^{かみとだほんむら}上戸田本村遺跡からは、古墳時代後期（5世紀末～6世紀末）の円墳が9基確認されています。

今回展示している南原7号墳出土遺物は、2009年の南原遺跡9次調査で確認されたものです。^{えんとうはにわ}円筒埴輪や、^{あざがおがた}破片ですが朝顔形^{はにわ}埴輪・^{うまがたはにわ}馬型埴輪・^{いえがたはにわ}冢型埴輪など多彩な埴輪が出土しました。

円筒埴輪には、胴部にヘラによってつけられた「×」や「||」等の記号があり、これらの記号は埴輪を作る職人個人を識別するために用いられたと考えられています。

また周溝からは、埴輪以外に壺・坏などが出土しました。これは、古墳祭祀における飲酒儀礼で用いられた可能性があります。

2013年に行った南原遺跡12次調査で検出された南原8号墳からは、市内で初めて^{にわとりがたはにわ}鶏型埴輪を確認しました。鶏型埴輪は県内でも出土事例が少なく、また県北に集中しているため、戸田と県北勢力との強い関係が想定されます。

1999年に行った上戸田本村遺跡4次調査で確認された古墳は、6世紀末の円墳で、2本の^{ちよくとう}直刀が出土した「くまん塚」の一部とされます。出土した埴輪は、円筒埴輪・人物埴輪・^{じんぶつはにわ}馬型埴輪です。

この古墳以降、7・8世紀の遺跡は市内で確認できないため、弥生時代後期から継続的に続いた集落は途絶したものとみられ、次に人の痕跡が確認できるのは平安時代になってからです。

戸田市の古墳 *Kofun in Toda City*



写真27 南原遺跡9次調査 2号古墳出土遺物



写真28 南原遺跡12次調査出土銅型埴輪



写真29 上戸田本村遺跡4次調査出土人物埴輪



写真30 上戸田本村遺跡4次調査出土馬型埴輪

第4章 平安時代から近代の戸田

古墳時代後期以降は市内で遺跡を確認できなくなり、再び人が住み始めるようになるのは平安時代前期（9世紀～10世紀）になります。市内では南原遺跡・前谷遺跡で竪穴建物、掘立柱建物、井戸跡を確認しています。前谷遺跡7次調査では、畑の畝跡を検出し、微高地上では畑作を行っていたことが分かりました。

平安時代後期になると再び遺跡が確認できなくなりますが、鎌倉時代からは安定的に集落が継続するようになります。この頃は市内西部は佐々目郷とよばれる鶴岡八幡宮の荘園になり、文献史料からも当時の様相が分かるようになります。また、近年遺跡として登録された大前遺跡は、市内では珍しい中世主体の遺跡で、戦国時代の堀跡・井戸・無数の柱穴が見つかりました。

近世になると戸田は幕府の直轄領となり、下戸田村・上戸田村・新曽村・下笹目村・早瀬村・惣右衛門村・美女木村に分かれます。

遺跡から見つかる遺物は、新たに磁器が加わり、近世の農村の生活を今に伝えています。

丸鞆 *Marutomo*

丸鞆まるとまは、奈良時代から平安時代にかけて、役人がベルトに付けた飾りの一つです。前谷遺跡 10 次調査で見つかり、市内で初めての事例となります。

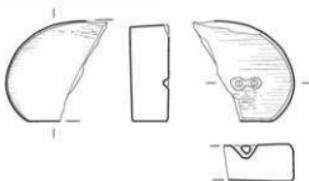
役人の官位によって材質や色が区別され、目視でその人の地位を判断することができました。

この丸鞆の材質は、玉髓ぎよくいであり、白色の石を用いるのは当時の法律の規定では五位以上の貴族とされています。このことから市内には貴族層と関係のある人が暮らしていた可能性があります。

なお、中央にある二つの穴は中であつており、そこに紐などを通してベルトに付けていました。



写真 31 前谷遺跡 10 次調査出土丸鞆



第 5 図 丸鞆実測図



瓦塔 *Gato*

瓦塔がたうは、奈良時代から平安時代にかけて作られた土製の五重塔です。

大きいもので 2m を超えるものもあり、集落内のお堂の中に安置されていたと考えられています。

戸田市で出土したのはいずれも前谷遺跡で、現在のところ遺構は確認できていませんが、平安時代には市域に仏教施設が置かれていたとみられます。

瓦塔の役割は、五重塔の代用品や信仰の対象とかいろいろ説があるんだって



写真 32 前谷遺跡 2・4 次調査出土瓦塔



第 6 図 瓦塔イメージ

前谷遺跡 7次調査 *Maeya site Seventh survey*

前谷遺跡7次調査は、2019年に行われ、平安時代の^{うね}畝、^{くわくみず}区画溝を検出しました。市内で中世以前の畑の畝跡を確認できたのは今回が初めてのことになります。

畝の状況から、複数の時期にわたって開発を行っていたと考えられます。



写真33 前谷遺跡7次調査1区完掘



写真34 前谷遺跡7次調査2区完掘

赤線部分が、畝を作るために掘った穴の跡。

南原遺跡 11次調査 *Minamihara site Eleventh survey*

南原遺跡11次調査は2012年に行われ、弥生時代後期後半の^{しやうこうしよういろ}周溝状遺構、中世の^{ほったて}掘立^{ほしらたてもの}柱建物・^{さくれつ}柵列・^{ひら}井戸・^{ほり}溝を検出しました。

このうち中世では、各遺構から常滑の大甕やすり鉢、中国産磁器が出土しているため、有力者の住居空間であった可能性があります。



写真35 南原遺跡11次調査空撮



写真36 南原遺跡11次調査 中世井戸完掘状況



写真37 南原遺跡11次調査出土 鉢

大前遺跡 1次調査 *Oomae site First survey*

大前遺跡は、2013年に確認された新しい遺跡で、主に戦国時代の堀、井戸、無数の柱穴^{ちゅうけつ}を検出しました。

市内では、この時期の遺跡は珍しく、また遺跡の南北から検出した堀は、断面が薬研堀^{やげんぼり}もしくは箱薬研堀^{はこやげんぼり}とみられ、当時の館跡である可能性があります。

堀の下層は、水の影響でグライ化していたため、使用していた時は常時水^たを湛えていたとみられます。



↑
第2号堀

写真38 大前遺跡1次調査完掘

↑
第1号堀



写真39 大前遺跡1次調査出土遺物

Haniwa Topics

大前遺跡では、中国の北宋の時代に鑄造された元祐通宝^{げんゆうつうほう} (1086年～) という銅銭^{ちゅうせん}が出土しました。

中世日本では、自国で通貨を作らず中国銭を輸入し使用していたため、中世の遺跡からは中国銭が多く出土します。

ただし、15・16世紀の中国では宋銭を私的に造る私鑄銭^{しちゅうせん}が大量に出回っていたため、これも私鑄銭の可能性もあります。

はくさい 舶載磁器

China porcelain

南原遺跡と鍛冶谷・新田口遺跡から、中国で作られた磁器が出土しています。ほとんどが龍泉窯りゅうせんようで作られた青磁せいじの碗ですが、景德鎮窯けいとくちんようの白磁はくじの皿もあります。

日本で磁器・青磁が作られるようになるのは近世初頭の時期であるため、それ以前は中国や朝鮮半島から輸入していました。当時は高級品でもあり、主に儀式などで使用されていたとみられます。

戸田市で見つかったものは、破片のみですが、いずれも13世紀の時期のものであるため、この時期に舶載品はくさいひんを所有できるような有力者が戸田に居住していたと考えられます。



第7図 龍泉窯・景德鎮窯位置圖



写真40 戸田市内出土舶載磁器

鍛冶谷・新田口遺跡9次調査 *Kajiyasindenguchi site Ninth survey*

鍛冶谷・新田口遺跡9次調査は、2015年に行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構・溝、中世の溝・井戸・土坑、近世の溝・井戸を検出しました。

鍛冶谷・新田口遺跡の中でも中世・近世の遺構・遺物が多く確認された場所で、中世から継続的に集落が続いていたことが分かります。



写真41 中世2号井戸跡



写真42 中世4号井戸跡



写真43 鍛冶谷・新田口9次調査出土中世陶器



写真44 鍛冶谷・新田口9次調査出土近世陶器

鍛冶谷・新田口遺跡6次調査 *Kajiyasindenguchi site Sixth survey*

21

鍛冶谷・新田口遺跡6次調査は1992年に行われ、弥生時代後期の方形周溝墓・溝・土坑、近世の堀・溝を検出しました。

方形周溝墓は、他の方形周溝墓群と離れた箇所で見つかったため、鍛冶谷・新田口遺跡内では、墓を共有するグループが複数存在していたと考えられています。

また、近世の遺構から、磁器の碗や陶器の徳利・すり鉢が出土し、当時の暮らしの一端が明らかになりました。



写真45 鍛冶谷・新田口遺跡6次調査発掘

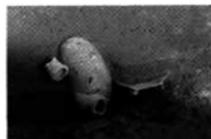


写真46 4号土坑近世陶磁器出土状況



写真47 鍛冶谷・新田口遺跡6次調査出土 近世陶磁器

Haniwa Topics ~ 焙烙 ~

近世の遺構からは焙烙^{ほうらく}と呼ばれる豆等を炒る時に使うフライパンのような土器が多く出土します。

戸田市で出土する焙烙は底が平らで内側に吊るす用の耳を付けています。これは、農村部は囲炉裏で吊るして焙烙を使用するためこのような形になっていますが、都市部ではカマドを使用するため、底は丸くなり、内側の耳もなくなります。



写真 48 上戸田本村遺跡4次調査出土 焙烙

22 幕末・明治時代の磁器 *Bakumatsu and Meiji period porcelain*

大前遺跡周辺地域での試掘調査で、幕末・明治時代頃の磁器がまとめて見つかりました。

磁器を主体とし碗^{わん}、急須^{きゅうす}、燗徳利^{かんとくり}、盃^{さかずき}などの器種があり、煎茶に用いられた器種が多いことが特徴的です。

磁器以外にも大量の瓦^{かわら}が出土したことや、その上の層が炭化物^{たんかぶつ}・焼土^{しょうど}を多量に含んでいることから洪水・地震などの災害による一括廃棄の可能性が考えられます。



写真 49 大前遺跡周辺地域出土 幕末・明治時代の磁器

統制陶磁器 *Second World War's ceramics*

第2次世界大戦中は、金属器の使用が制限されたため、陶磁器製のものが代用品として多く作られました。

陶磁器を作る会社は国の管理下に入り、各会社に振られた統制番号を製品の裏につけることになりました。

この皿は、南原遺跡の試掘調査時に盛土から見つかったものです。裏面に統制番号が付けられ、写真左の皿には「岐 162」、右の皿は「瀬 117」と付けられています。



写真 50 南原遺跡出土 統制磁器皿

文化財企画展
ここまで分かった！戸田市の埋蔵文化財最新情報展
解説冊子

発行・編集 戸田市立郷土博物館
〒335-0021 埼玉県戸田市大字新曽1707番地
発行日 令和5年5月12日